

みおしえ



現^{いま}在を生きる



聖觀世音菩薩
市川陽山謹子


昏迷の時代

長福寺 吉田真典

野球界のスーパースタートとして、常にプロ野球の栄光を担い続けてきた長嶋茂雄監督が、巨人軍の監督勇退を表明しました。

選手として活躍した十七年間のダイナミックな打撃フォームと華麗な守備に当時の野球少年たちはみな憧れたものでした。それは巨人ファンだけではなく、プロ野球ファン、あらゆる人々を楽しませてくれました。昭和四十九年「わが巨人軍は永久に不滅です」という名セリフを残して現役を引退。その後、監督として通算十五年、リーグ優勝五回、日本選手権優勝二回。その成績だけでは表せない様々なドラマを多くのファンに見せてくれました。

監督勇退を表明した翌日の新聞に次のような記事がありました。

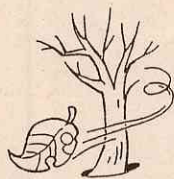
『経済学者の島田晴雄さんが面白い計算をしている。背番号3が現役選手だった一九七四年までの十七年間、日本経済は年平均九・三％の成長を遂げたという。ちなみに入団前は七％程度だし、現役引退の後は四％以下に急降下する（ちくま新書「日本の雇用」）高度成長はそのまま、「長島の時代」でもあった。ファンの間で今も根強い「巨人が勝てば景気が上向く」という説は、あの時代を快活に伴走した背番号3の残像が支えているのかも知れない。』

長嶋監督と同世代の親たちは、戦中戦後の大変な時代を

生き抜いて来ました。子供たちに少しでも豊かな生活をさせたい、少しでも高度な勉強をさせたいと願い、前だけを向いてがむしゃらに働いてきたはずです。おかげさまで私たちは、何不自由なく豊かな社会の中で生活して行くことができました。

しかし、私たちは豊かな社会環境の中で育ちながら、いつしかおかげさまでという感謝の気持ちを忘れてしまったようです。皆さんにも覚えがあることでしょう。「おとうさん、おかあさん、ありがとう。いただきます。」と言って昼食をいただいた幼稚園の頃、素直で純粋な気持ちしか持ち合わせていなかったと思います。

バブル経済崩壊から現在まで、暗いニュースばかり目立ち、日替わりで変化する社会状況のなか、人々は一瞬にして良い方向へと変えてくれるスーパースターの出現を待ち望んでいるかのようです。しかし、秩序が乱れ、人々は義務を果たさず、自分の権利や主義主張ばかりで、他人の痛みや意見には目もくれずにいて、明るく希望のある未来がやって来るはずがありません。そこで私たちひとりひとりが、家庭、学校、会社、地域社会のなかで光り輝く存在となり、「あかるく」「ただしく」「なかよく」生活できる環境を作ることが大切です。そのためにも早く阿弥陀様の存在に気づき、ご縁を結ばれることです。この昏迷の社会環境を変えることが出来るのは、一人のスーパースターではなく、阿弥陀様の御心をいただいた私たちひとりひとりの活躍なのです。



「氣づき」

—日々のお念仏から—

崇蓮寺 池田常臣

ある大学教授がしみじみ語った事である。「私に五才になる男の子がいる。半年ぐらいまでは、誰が呼んでも元氣よく「ハイ」と返事をした。ところがどうしたことか。このごろ、とんとしなくなったのである。よく考えてみると、原因が、どうも私自身にあったらしい。仕事に忙殺されて、妻が呼んでも、つい黙って仕事を続けることが、たびたびあった。それを見習って子供は、返事をしなくなったようである。そこで私はなんとかこれを矯正せねばならぬと、色々試みたがさっぱり効果が現れない。最後にそして気がついた。私自身がまず、誰かから呼ばれたとき、はっきり返事するのが一番」と。するとどうだろう。いつとはなしに子供は「ハイ」と快活に答えるようになったではないか。ふたたびこうして、家の中が明るさを取り戻すことができただのである。」(『光に向かって百の花束』高森顕徹著)

この話を読んで、はっとしたものを感じたのです。身近な何気ないことを、悪気が無くても、何となくないがしろにしてしまい、思わぬかたちで、結果が現われてくることってありますよね。この話のように途中で気がついて、修正できれば良いのですが、そのまま続いてしまい、あとで取り返しのつかないことになってしまうことも十分あり得ます。もしこの男の子の心が閉ざされたまま成長したら、どうなったでしょうか。呼んでも返事しない、家の中も暗

くなっていく、そればかりでなく、ひょっとしたら、成人式の最中に、暴言を吐いたり、暴力的な行為に走っていた、なんてことが考えられなくもありません。

昨今、色々な局面で問題を起す若者達。突然物事の道理に暗くなった訳ではなく、幼少時からの身近な影響により、形成されていったのです。親の背中や養育環境の影響、その結果そのものなのです。他の影響がないとは言いませんが、子供や若者に、「ああせい、こうせい」とただ求めるのではなく、その前に、まず自分自身に目を向けてみることも大切ではないでしょうか。己を見つめ、正すことが肝心です。そう大げさでなく、まず身近にできることから考えてみたらいかがでしょう。法然上人は

世間のいとなみひまなければこそ、念仏の行をば修すべけれ

(『念仏往生義』)

とお示しされています。世間の営みに追われて忙しい毎日だからこそ、お念仏を唱えるべきなのです。いつでも、どこでも、誰にでもお唱えできるお念仏であるからこそ、慌ただしい世間の営みの中でも修めることができるのです。と日々のお念仏を勧められておられます。

忙しいからと言って、呼びかけられても返事をしない生活を改め、忙しくとも少しばかりの時間を見つけて、お念仏をお唱えさせていただく。そんなチョットしたことが子供や若者への良い導きとなり、素直な心を育むのです。「ああ忙しい」ではなく、「なむあみだぶ。なむあみだぶ……。」そんな環境で育った子供は成人したその時でも、呼びかければ「ハイ」って返事が返ってくることでしょう。

今からでも、まだまだ間に合いますよ……。きつと。

親 縁（しんえん）

朝晩、今日一日の感謝の気持ちを込めて、お仏壇のご本尊にお参りします。また、ご先祖の方々、先立たれた方々にお参りします。菩提寺でも同様にお参りします。

私たちと阿弥陀様との間、つながりを法然上人は次のようにお説きになります。

「みほとけ（阿弥陀様）を心に念じて、そのお名を唱えて敬い礼拝をすれば、みほとけは、その人をご覧になり、お唱えするお念仏の声をお聞きになり、その人を知りお守り下さる。私たちとみほとけとは親しいものとなっている」

阿弥陀様と私たちがとても親しいことで、これを親縁（親しいご縁）といいます。

私たちの日々の生活の中で、みほとけと親しくさせて戴くことは、とても大切なことなのです。

【編集後記】

◇ 今回は吉田真典・池田常臣両人に原稿の執筆をお願いした。お二人には改めて感謝申し上げたい。

◇ 何かと暗いニュースが多い現在、日本において「思いやりの心」が欠けているように思う。個人の権利やプライバシーが優先され、他人への配慮がない。この問題は若者だけではなく、大人にも言えることである。大人の言動と行動が伴わなければ若者に対して説得力はない。「思いやりの心」。みんなが持てれば、明るいニュースも増えるはず。

〒三六二一〇〇四七

埼玉県上尾市今泉一五六 十連寺内

『みおしえ』編集室 代表 宇高 康哲